

氏名	田中二郎
	たなか じろう
学位の種類	理学博士
学位記番号	論理博第475号
学位授与の日付	昭和49年9月24日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	The Central Kalahari Bushmen —A Study of Ecological Anthropology— (セントラル・カラハリ・ブッシュマン—生態人類学的研究)

論文調査委員 (主査) 教授 河合雅雄 教授 池田次郎 教授 近藤四郎

論文内容の要旨

申請者はカラハリ砂漠に住むブッシュマンを対象として、前後2回計22カ月にわたる現地調査をおこない約200人のブッシュマン集団の狩猟採集生活に重点をおきながら、彼らの環境への適応の実態を生態学的に捉えようとした。

中央カラハリの Kade 地域は、年間雨量400mmという乾燥地帯で、1年を通じて地表水を利用できるのは60日以内にすぎず、ブッシュマンはそれ以外の季節の水分摂取を野生のメロンや若干の根茎類に頼って生活している。生計活動は、女が採集、男が狩猟をおこなう。彼らの食生活に安定性を与えているのは、採集によって得られる堅果、根茎等であり、それらの年間の推移と生産量に支配されながら、約4,000 km²に及ぶ広範な遊動をおこなっている。しかし、彼らが「真の食物」と見なすのは、狩猟によって得られる肉である。申請者は、これらの動植物のすべてを列記し、その年間の推移、そして獲得法についての詳細な記載をおこない、年間の消費量、摂取カロリー量、それらを得るのに要した労働量を算出している。注目すべきことは、このように完全に自然に依存した狩猟採集生活が、従来考えられていたように貧困でみじめなものではなく、1人1日あたりの労働時間も3時間半にすぎないということである。獲得物の分配は、平等主義 (egalitarianism) に支えられ、性、年齢別に見られる食物のタブーは、幼老者に対する食物分配の配慮の伝統化したものと見なしうる。

社会組織は、首長、性による以外の分業、専業、社会的階層を欠く。遊動の単位集団は、いくつかの家族の集合からなるが、つねに家族を単位とした離合集散がおこなわれており、申請者は、従来狩猟採集民の集団にあてられていた band という用語をこの単位にあてるのは適当でないとして、camp という用語をこれにあてている。申請者は、camp の離集の実態とその動機を詳細に分析し、この集団のもつ可塑的性格を、彼らの社会関係および苛酷な自然に対する社会的な適応として捉えている。

以上の資料ならびに分析にもとづいて、申請者は、まず人類社会の原初社会において、野生植物を対象とした採集経済が重要な位置を占めていたにちがいないことを説き、とくにジャケツイバラ亜科ハカマ

カズラ属 (*Bauhinia*) の2種の堅果の重要性を指摘した。最後に、離合集散の可能な社会構造という点で、近年次第に明らかにされつつあるチンパンジーの社会との比較を試みている。

参考論文3編は、申請者が初期におこなった西南インドのニルギリラングール (*Presbytis johoni*) についての最初の生態学的観察記録、第1回のブッシュマンの調査終了後に書かれた予備的な報告、第1回第2回のブッシュマンの調査資料を併せ、とくに生計活動に重点をおいて書かれた邦文の報告、以上3編である。

論文審査の結果の要旨

カラハリ砂漠に住むブッシュマンの研究は、今日までに主として形質人類学、言語学、民俗学、文化人類学等の分野でおこなわれてきたが、彼らの環境への適応の実態を狩猟採集生活に焦点をおきながら生態学的に捉えようとした試みは、I. DeVore および R. Lee によっておこなわれた Kung ブッシュマンの研究と申請者によっておこなわれた Gwi および Gana ブッシュマンの研究以外にはない。しかし、Kung ブッシュマンが年間を通じて地表水に恵まれた地域において半定住的な生活をおこなっているのに対して、申請者が調査対象とした中央カラハリのブッシュマンは、年間わずか60日間しか地表水を得ることができないという苛酷な環境下において、4,000km² という広域をつねに遊動しながら生活している。従って申請論文には、年間雨量わずか400mm というこの乾燥地帯における、例えば飲料水の獲得についての驚くべき事例等、多くの新しい発見がふくまれている。

申請論文は、ブッシュマンの自然環境との相互関係、そして自然の利用を扱った部分と、社会的なレベルでのグループ・ダイナミックスや社会関係を通じてみた適応の分析という2つの部分に分けることができる。前者においては、彼らの食料獲得過程としての狩猟採集活動、消費過程としての食生活についての、量的質的に充実した資料が提出され分析されている。食物の中で植物性の食物が80%を占めており、それが彼らの食生活に安定性を与えていること、1日の1人あたりの平均労働時間は3時間半を越えることがなく、農耕や牧畜の要素を全くまじえない純粋に自然に依存した生活が意外な安定性を保ちえている点など、本論文は、ブッシュマンの生活についての、また人類の乾燥地帯への適応についての従来の考え方に、大きな訂正を迫っているといつてよい。これらの資料は、申請者がブッシュマンの集団の中に住み、彼らと生活をともにすることによって始めて得られた資料であって、従来の外側から眺められたブッシュマンの像や、言語のみに依存して得られた資料とは異質なものである。

後半において、申請者は、彼らの社会構造についての分析をおこなっているが、主として社会人類学の領域でおこなわれているようなスタティックな社会構造の把握にとどまらず、つねに離合集散をくりかえす流動的な彼らのグルーピングの実態が綿密に追跡され、従来の狩猟採集民の社会的単位集団に与えられた band の概念に対する批判がおこなわれている。また、ブッシュマンの集団のもつ可塑性の中に、苛酷な環境に対する社会的レベルで適応的な側面を捉えているが、これは独創的な点として評価することができる。

最後に申請者は、ブッシュマンについて得た資料と分析の結果を、近年これと類似のアプローチによって得られた類人猿の資料と比較し、人類社会の進化の理論を構築するための方法論を模索しようとしている。

る。この部分は、まだ将来の資料の補足を待たなければならない点が少なくなく、現時点で必ずしも成功を収めているとはいえないが、今日までのこの種の研究がせいぜい後期旧石器時代との比較およびその復原といった域を出なかったことを思えば、独創的な試みとして注目されてよい。

参考論文3編中2編は、同じくブッシュマンの生態に関するものであり、主論文と併せて上記の諸点を補足するものである。また他の1編は、申請者の初期の研究体験を示すインドのニルギリラングール (*Presbytis johani*) の記録であるが、この報告が同種についての最初の生態学的記録であることを付記しておきたい。

よって、本論文は理学博士の学位論文として価値あるものと認める。